

特集「表現」について

崔 吉 城

東亜大学 総合人間・文化学部 文化文明史研究室

E-mail: kschoi@toua-u.ac.jp

表現とは内面的なものを外面的に客観視させることであり、広義では文化そのものをさすほど広いのであるが、狭義では表情・身振り・言語・記号・造形物などを指す。最も代表的な表現といえば言語であろう。言語といってもボディランゲージをも含めて、さらに言語を手段としたコミュニケーションや芸術などまで広く広がっていく。

私が三十数年前に日本に留学してからまもなく指導教官が亡くなり、お通夜と葬式に参列したことがある。特にお通夜で奥様が泣かないで接待している姿と静かなお葬式に驚き、また悲しさのない葬式だと感じた。夫をなくした妻がどうして正気で座って客を接待することができるのか、私はカルチャーショックを受けた。それは韓国人からは異様な光景であった。人前でも大泣きする韓国人、人前で涙をこらえる日本人、この違いはどこからくるのであろうか。悲しさが無いはずがないのになぜ泣かないのか疑問であった。私はここで日韓文化の表現の大きい違いがあると感じた。つまり韓国人の大声をだしての泣き方に比べて日本人の泣き方は抑制的な表現の差であることに注目した。

金日成の死去の時北朝鮮の多くの人が痛哭する姿が日本に放映された時、日本人はショックをうけたという。もちろん今の時代に政治支配者が亡くなったという事で国民が痛哭することは変に思われるかもしれないが韓国人の文化的背景から理解しなければならない。韓国人は基本的には親が死んだ場合は泣き放題である。そ

れは孝行の表現であり、心理的鬱憤の捌け口にもなるからであろう。韓国の喪主は泣いて声が枯れるのが普通である。自分の親の死だけではなく、親族や親しい人の死に対しても泣くのは人情である。泣きの抑制は男には求められるが場合によっては人間味のあることとして評価されたりもする。兵庫県の地震のショックは悲惨なことでもあったが、私は韓国人としてそのような非常な時に人々がそれほど泣かず社会秩序を守りながら行動をするのを見て、1920年代関東大地震災の時をイメージとして持っているものとははずれていることを感じた。

以上、例を挙げたように韓国人に比して日本人は感情を抑制する。私がはじめて日本に着いて、ある老人が電車の中で老眼鏡をかけて一所懸命にノートを取るのを見て、日本の教育水準が高いかと思ったことがある。しかし長い間、観察しているうちにそれは日本文化であると思うようになった。それを言語表現すると口頭文化 oral culture より文字文化 written culture の傾向が強いといえる。特に私の経験では韓国人と比べると日本人が文字で表現することが多いと感ずる。アジアの中でも日本人は文字によるコミュニケーションが多い。年賀状、結婚や葬式のお礼の手紙、日記、日常生活上のさまざまな文字文化がある。田舎の小さい博物館や旧家を訪ねてみると古文書が多く残っているのも見かける。古くから日本人はよく書き残したなと感嘆せざるをえない。

講演とか講義は一種のパフォーマンスであり

人のフィードバックによって話を進められる。基本的にスピーチによるコミュニケーションであるのでパフォーマンスが重要視される。しかし日本では講演の時に講師は準備した資料のページを捲り、聴衆が多い場合には一斉にページを捲る音が大変煩くなる。このようなことは大学の授業でもよく行なわれるごく一般的のことである。これが日本文化の表現構造を象徴的に表すと思う。

私は日本人の表現様式に関心をもって以来、悲しさと涙、泣くこととの関係に関心をもって世界中広くフィールドワークに出掛けた。1986年に韓国語版で『韓国人の泣くこと』を出版した。それが日本語版としての訳書『哭きの文化人類学もう一つの韓国文化論』（勉誠出版、2003）として出版された。この本は、動物、昆虫の鳴き、人間の男女の泣き、儒教葬式における哭きなど主に東アジアの哭きをテーマにした一種の比較文化論である。悲しい感情と泣き方の激しさとは必ずしも比例するものではない。つまり泣くということは表現様式に過ぎないことが判った。

本号は知識（林隆也）、ユーモア（楯本知子）、舞踊（榎田芳美）、絵図の方位（磯永和貴）をテーマにしてそれぞれの表現を考察して特集したものである。それぞれの横のつながりが十分議論されていないが、それを顧慮しながら読むのが一味かもしれない。